

一
甘
會
秋
名
之
耻
柿
美
妙
稿

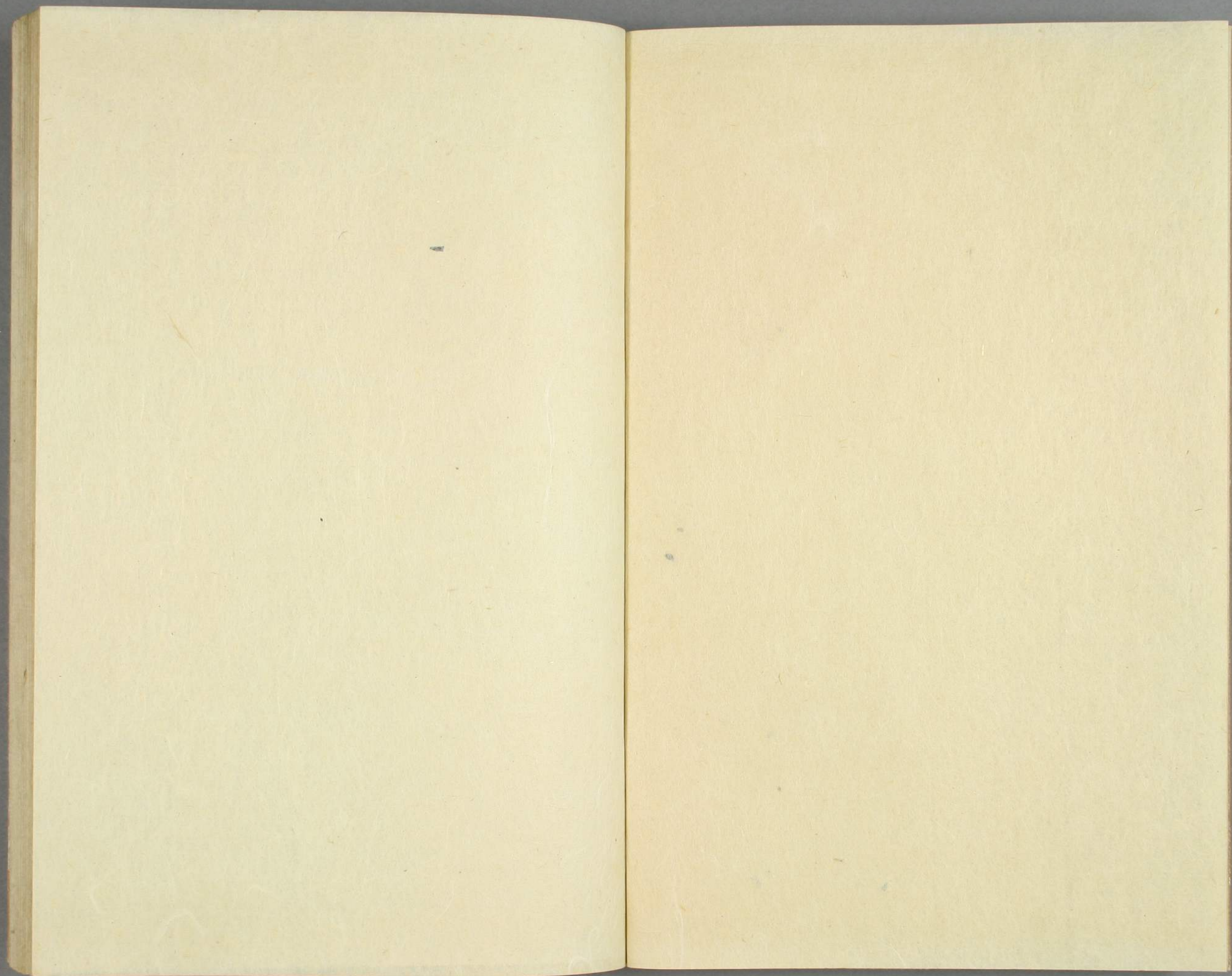


本問文庫
文庫 14
A 59



文庫14

A59



一淡
一甘
會
替
火
耻
柿

一法甘會然目之耻掃

東京 櫻井雄祐 著



第一 夜半の盜賊

會然の耻掃、ものゝ涙を知らずとも、これに思ひく、勉めらば、
を甘き蜜を載る可なり。五斗米を以て、
此田の裡に、酒を折る。猪の糞、
作子、暗きま、流す。免さとも、甘味を、
其思を嘗め、本、果を、
ちつ、おろし、果敢、
観る、

井手河火... 又の漢... 又る... 如く... 夫の傍... 如く... 五の各... 逃げ... 逃げ... 逃げ...

かをも追... だも... 一散... なる... 人も... 蘭様... 投...

おのつてを青嵐如婢をたてしと村在均く地ちも何がう段下
まふは燭若入れと三つあめしうられもてと多しうもて入えのま
るふあると告ぐもてと三つあめしうられもてと多しうもて入えのま
しとまう。よくあつても又よのなほとて敷をゆ傍子人肉は
とて又入てたてくもわわ木をよ実所しとも所まはのり
賊を直つてと敷をゆ傍子人肉は
苦やまるとちと抛ちて危急を免れしうもてと三つあめしう
りしと再度夫を打てんてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
つづる身と頸子所をく負ひしうもてとてとてとてとてとてとて
地を縁を標えんととてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
御牙の為子とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

此中より、海舟の伝人とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ことしとととととととととととととととととととととととととと
ははははははははははははははははははははははははははははははは
よりこゝに処子何し者かとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ついでにも苦やまるとちと抛ちて危急を免れしうもてと三つあめし
又合をたれとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
愈後志しとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と、現しとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と二十のよとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と、赫やらるる眉を隔く鼻はく横より見れを頬をさす顔
棒はまも、殿志たる如志、口かく横子張り身を柔かにとてとて

を鳥帝へ奉りしは
秋を地出づるを
川夜子刻る也
ふれり日昇り
を以斗極度
を五房く
此神の
軟屬
うの
痛も
謝辭
や鳥帝へ奉りしは
秋を地出づるを
川夜子刻る也
ふれり日昇り
を以斗極度
を五房く
此神の
軟屬
うの
痛も
謝辭

又
子

はまの
うの
痛も
謝辭
や鳥帝へ奉りしは
秋を地出づるを
川夜子刻る也
ふれり日昇り
を以斗極度
を五房く
此神の
軟屬
うの
痛も
謝辭
や鳥帝へ奉りしは
秋を地出づるを
川夜子刻る也
ふれり日昇り
を以斗極度
を五房く
此神の
軟屬
うの
痛も
謝辭

